

作品設計 日銀跡地 ―金沢らしい114年目の在り方―

建築学部 建築学科

指導教員：蜂谷俊雄 教授

4AA2-31 中川将史

日銀跡地

ー金沢らしい 114 年目の在り方ー



2AA57 1900778 4AA2-31 中川将史

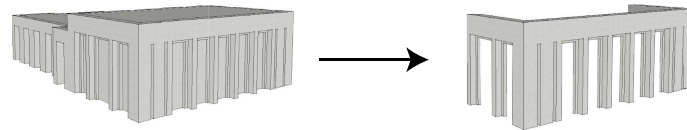
■ 香林坊と日銀敷地

香林坊の街並みを歩いて見てみると、区域の関係もあるとはいえ、観光街という割に「金沢らしさ」のようなものがない、どこにでもある地方都市の景観だと感じた。金沢を代表する観光場所でありながら、街の装いに金沢感がないのは景観として良いのだろうか疑問に思った。

そこで、既に移転が決まっている日銀の敷地を使って、香林坊の街並みに「金沢らしさ」を創出できないかと考えた。また、今までブラックボックスかつ経済のエンジンだった日銀敷地を、オープンな空間かつ新たな市民活動のエンジンに作り変えることで、金沢という都市にさらなる豊かさをもたらすのではないかと考えた。

■ 「金沢らしさ」の定義と表現

暮らしの中に歴史の痕跡が散見され、都市の時間軸が感じられることが、金沢という都市が持つ特色であり、私たちが普段感じている「金沢らしさ」の1つではないだろうか。ともすれば、敷地内の既存の日銀建物は、香林坊が金融街だったころの歴史の象徴であり、痕跡として残すべきものだと考えられる。



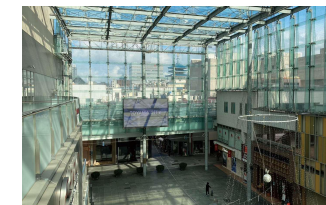
既存の建物からは、市民の記憶に根付いているであろうファサードのみを残して建築を考える。

■ 提案する建物の用途

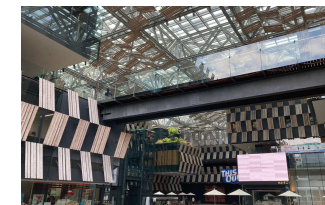
新しく敷地に付与するプログラムとして、富山や新潟には有り、金沢には無いと感じた「大規模な屋根付き広場」を提案する。キャパシティに制限のある駅前もてなしドーム、悪天候により延期などが発生するしいのき緑地等に代わる、新たな街の中心地形成を狙った建築を行う。



もてなしドーム（金沢）



富山グランドプラザ（富山）



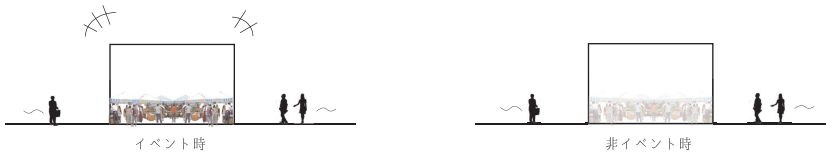
アオーレ長岡（新潟）



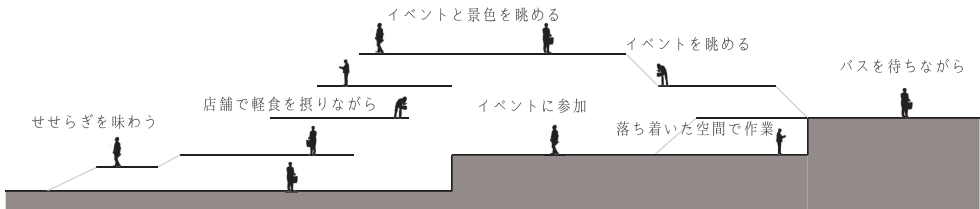
年中賑わう集いの場

まちの中心地となるような空間を想定したとき、常に人が集まっていて活気があることが必要だと考えた。富山グランドプラザのように、雨の多い北陸で誰もが使える屋根付き広場を作るとは、年単位でイベントの予約が埋まるほど需要のある提案だと考えられる。

しかし、イベント広場等の空間は通常、イベントの開催事こそ賑わってはいるが、非イベント時は閑散としていることが多い。そこで、内包する用途や空間の特徴、ゾーニングによって、非イベント時でも人が集いやすく滞留しやすいような設計を行う。

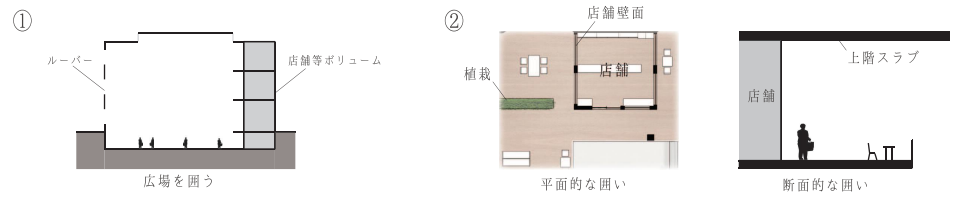


様相の違うそれぞれの居場所



人が滞留する空間を作るためには、訪れた人が長居できるような空間、各々がほっと一息つけるような空間が必要である。この建物内には、様相の違う様々居場所が設けられており、一人一人が用途・目的・好みに合わせて居場所を見つけ、滞留できるようになっている。

滞留する空間



広く開放的に作られるアリーナ空間に対して、人が滞留したくなる空間というのは一定の閉塞感・囲われ感があり、ある種の安心感のようなものが必要となる。そこで、今回は下記の2つに考慮し設計を進める。

- ① ルーバーや建物ボリュームで広場そのものを開かれつつも閉じた空間とする
- ② 観覧空間を店舗の壁や植栽で平面的に、上階のスラブで断面的に囲われた空間とする

1 1F バス停前エントランス



2 G1F アリーナ沿い滞留空間

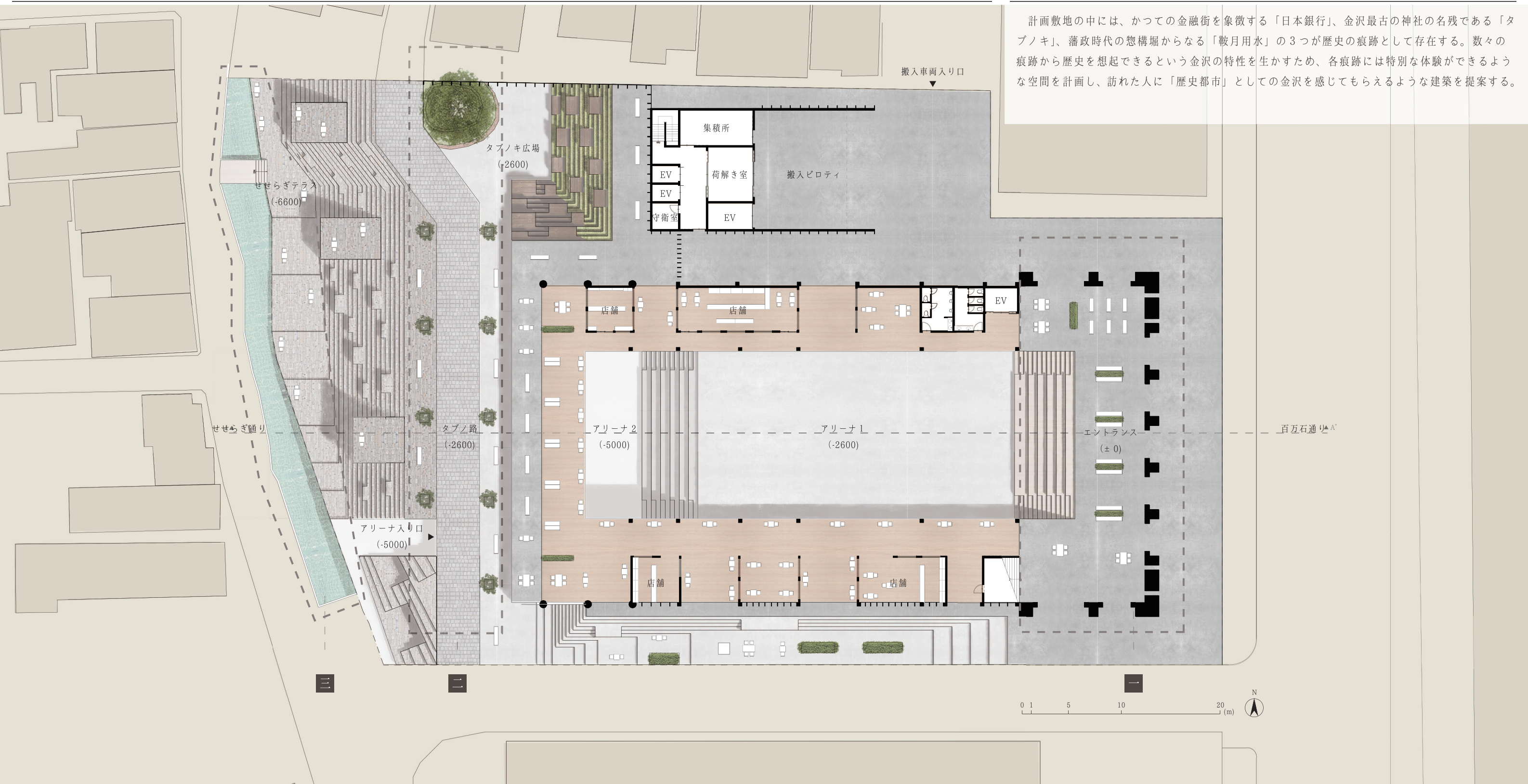


3 3F 長町方向を望む展望デッキ



4 G1F 緑が囲むタブノキ広場





一 1F 日銀ファサード



壁となっていたファサードが広場へのゲートへ

二 G1F タブノ路



参道空間の先、樹齢500年の神木へ

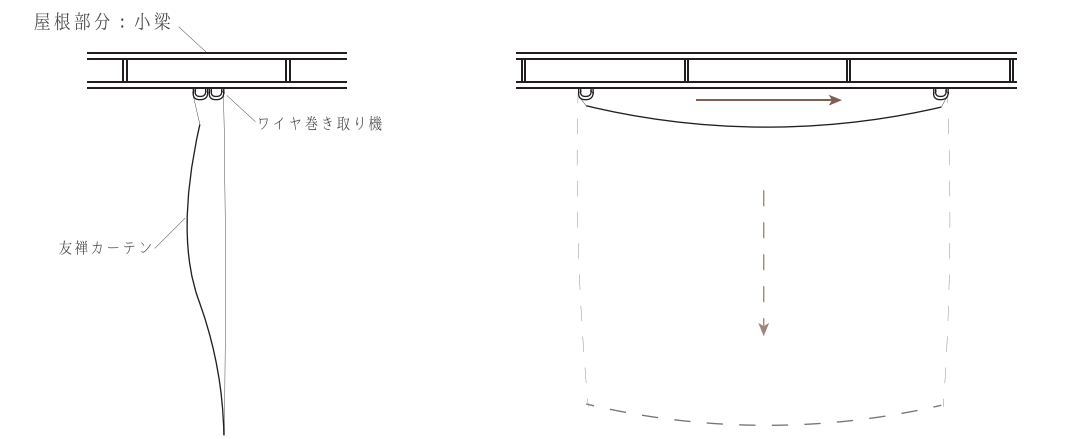
三 G2F せせらぎテラス



柵と段差で隔たれていたせせらぎに、触れられる距離感

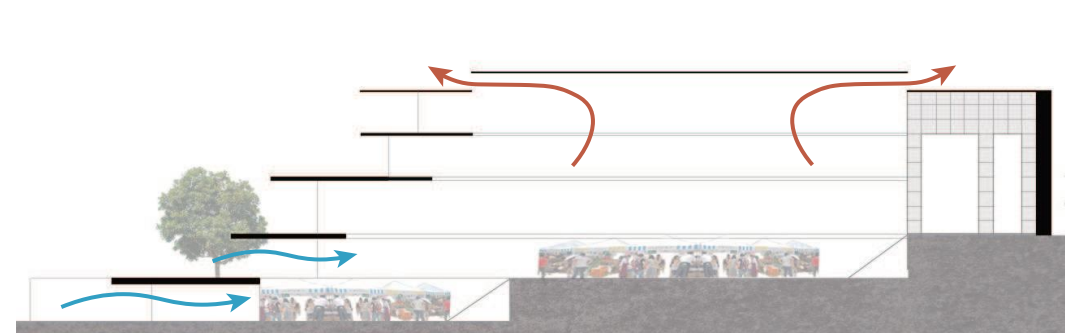


■ 広場を覆う友禅流し



広場の屋根部分には、石川を代表する工芸品の1つである「加賀友禅」を用いた布を吊り下げている。工芸を通した「金沢（石川）らしさ」を表現するとともに、日差しの強い日等に広場を守るカーテンのような役割を担っている。ワイヤを移動させることで屋根を覆う幕のような形になり、広場に入る光をやわらかく、優しいものへと変化させる。

■ 屋根を活用した通風



本提案は建築全体が半屋外空間であり、季節に合わせて様々な場所から空気が流入するようになっている。内部で暖められた空気は、屋根部分に設けられた開閉式の通気孔から外へと抜けていくよう計画されている。通常、広場やドームなどの空間では、そこに生じる熱気や滞留する空気によって、空間内が蒸し暑くなり、空気の質が悪化してしまうため、換気についての配慮が必要である。本提案ではこれに対し、パッシブな換気システムで応えられるように計画した。

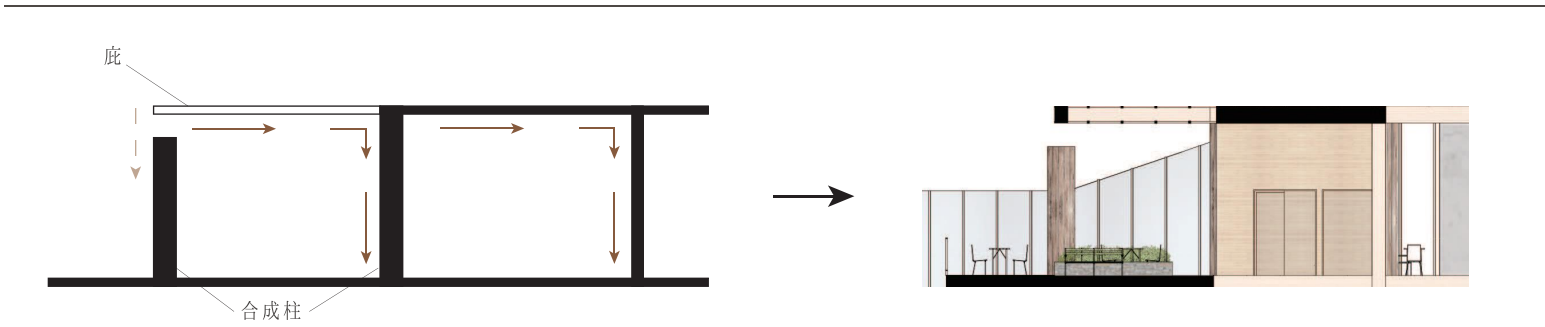
■ 木の文化都市としての金沢



金沢市は、新たな都市の発展の方向性として「木の文化都市・金沢」を提唱している。これからの時代は、木の質感も1つの「金沢らしさ」になると考え、本提案も木を重視した建築としていく。建築躯体は、広場のスパンを作るためS造とし、表面に集成材をまとわせることで木の質感を表現する。

また、最も古い集成材と言われている東大寺大仏殿の合成柱（右）を、木が持つポテンシャルの最たるものとしてリスペクトし、その工法をアレンジして提案の一部の柱に組み込んだ。木の文化都市を象徴し、金沢らしさを生む一つのモニュメントとしてとして人々に親しまれることを図る。

■ 各フロアの底部分



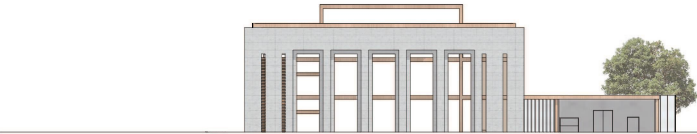
各フロア西側のデッキスペースにはそれぞれ底がかかっており、それぞれせせらぎ通りや長町武家屋敷を眺められる、居心地の良い軒下空間のようなスペースを創出している。各デッキスペースの先端には左記の合成柱が立ち、デッキスペース角のフレームとして空間の雰囲気を引き締めている。

先端の合成柱は底の荷重を支えてはならず（真ん中部分に大きなたわみが生じるため）、あくまで意匠的な役割を持たせている。そのため、底を支える方法としては、柱に依存しない片持ち梁の形式を採用している。これによって、空間のフレームははっきりしつつも、柱と底の間に隙間のできた、独特の緊張感を持った空間に仕上がった。

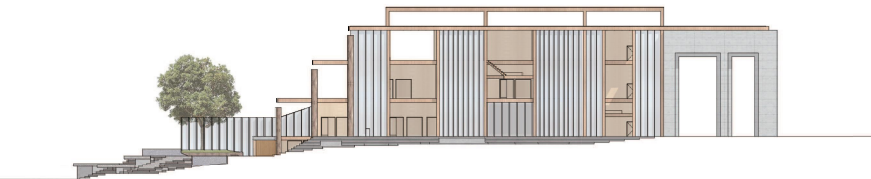
建物各面はそれぞれ固有の役割を持っており、これによって外観のテクスチャ、開放度が決定している。



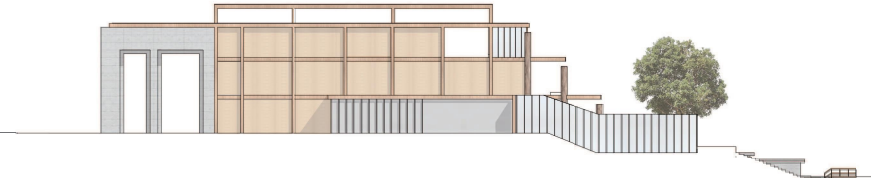
西立面図



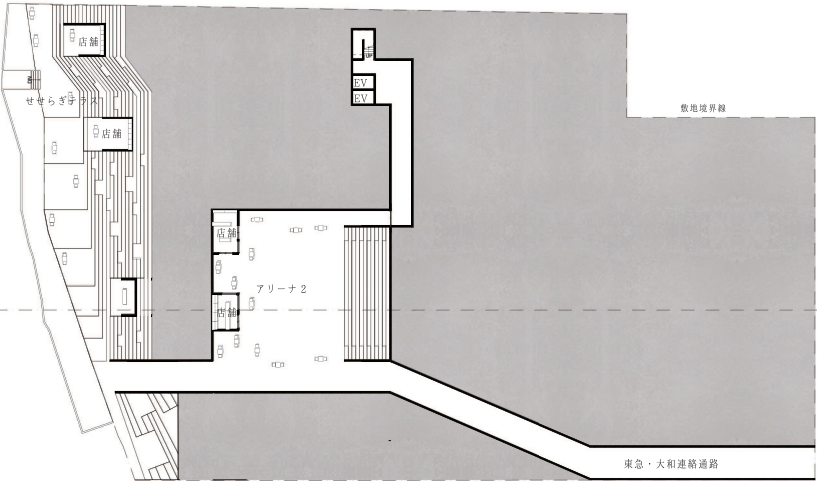
東立面図



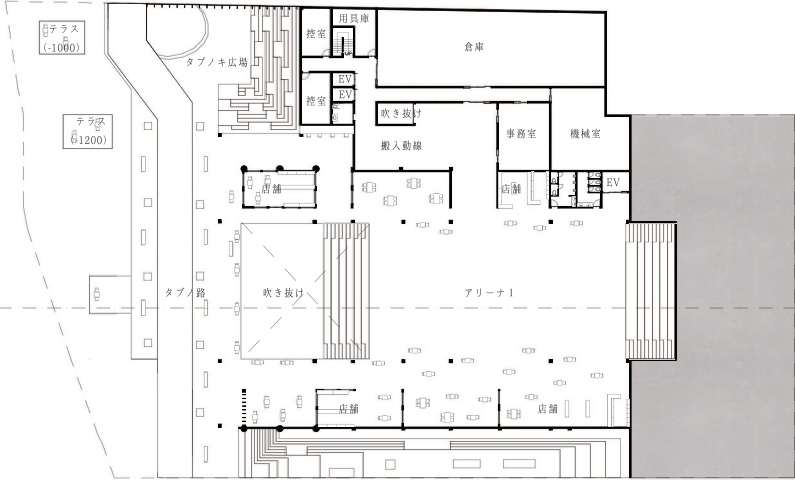
南立面図



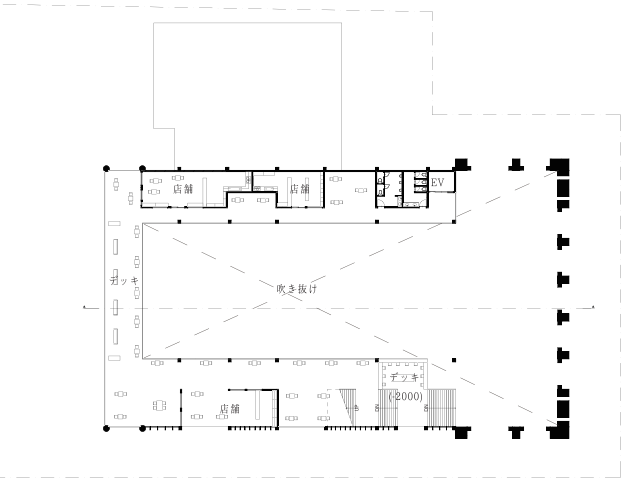
北立面図



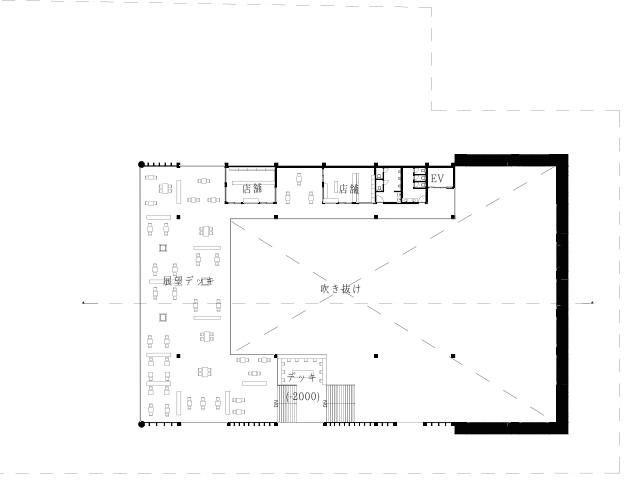
G2F GL-5000



G1F GL-2600



2F GL+5000



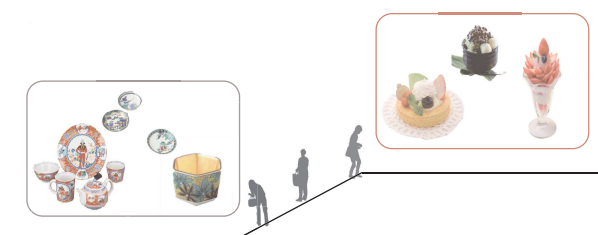
3F GL+10000



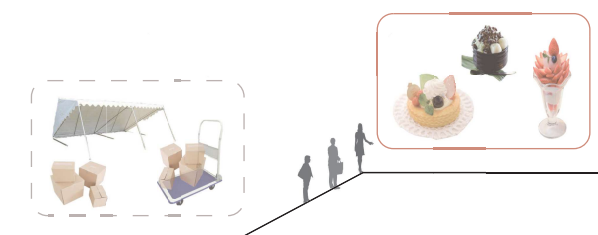
■ 複数のアリーナによる可変性

■ 利用されるイベント

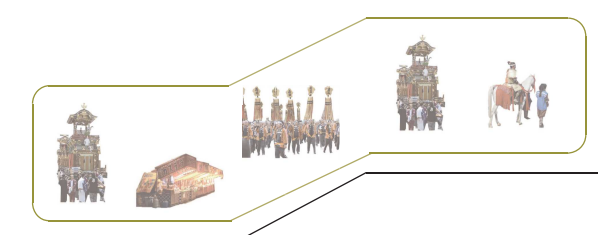
パターン 1



パターン 2



パターン 3



現在石川で開催されているイベント

- ・ 飲食マルシェ
- ・ 茶碗祭り
- ・ 百万石まつり
- ・ 北陸ラーメン博

等

類似の広場で開催されているイベント

- ・ 輸入車展示
- ・ アイススケートコーナー
- ・ ビアガーデン
- ・ 親子参加型料理・職業体験

等

イベントを行う広場空間は、間仕切り等の物理的な壁を設けておらず、単一的な大空間となっている。ここに、敷地の傾斜に合わせてレベル差を作り、段差による緩やかな空間の分節作ること、複数のイベント空間として利用することが可能となっている。（パターン1）これにより、どちらかのフロアが設営や入れ替えを行っているとき、もう一方のフロアでイベントを開催することができる（パターン2）ほか、空間の完全な分断を避けたことで、規模の大きなイベントの場合は、2フロアにまたがって開催することができるようになっている。（パターン3）

イベント広場の設計に際して想定するイベントの規模は、上記の「現在の石川（金沢）で開催されているイベント」と、富山グランドプラザ等をはじめとした「類似の（空間特性の）広場で開催されているイベント」を元に考案している。





全体写真



俯瞰写真



前景写真



後景写真



内観写真